

## デッサン力の確かさ

### 色彩 構図もみごと

《印象記》 白矢 勝一

以下は私がみた先生方の作品の印象記です(順不同・敬称略)。

海野 泉「バラとフルーツ」(20)

ユリとフルーツ」(20)

海野先生は日本を代表する画家林武に直接指導を受けられたことを、なつかしそつに話されました。林武の作品かと思われる画風、色彩、構図のよさは長年の実績を物語っています。花は生き生きとし果物は匂いを発するよつです。

江川 政昭「春の訪れ」(30)

広島からほとんど毎年來られています。今年の絵はいつもと違い緑の絵その中に赤い屋根の小さな家がひっそりたたずんでいます。静かな落ち着いた気持ちにし

てくれる絵です。よく見ていると、江川先生のいつものタッチが絵の中から浮かんできました。江川先生のタッチは水面に特徴があります。素晴らしい一枚でした。

安彦洋一郎「花火」(10)

先生は前にも懇親会で奇術を度々行われ、会場を和やかにされており、

「僕は早描きでね」と愉快そうに絵の解説をされていました。コンピュータグラフィックで絵も描かれるそうで頼もしい限りです。今回の絵は招待用DM八ガキにも推薦されたもので、夜空に咲く花火を見事に表現されています。

秋葉 琢磨「禅定仏(墨彩画)」(30)

秋葉先生は書も俳句もなされ、陶芸も達人級。今回は墨彩画に挑戦されたのと、先生の禅定仏はちよつと先生に似ている感じがします。世の中の全てに通じ和を尊ばれる仏様のよつです。

秋葉 則子「静寂(墨彩画)」(30)

則子先生の「静寂」は不思議な絵です。この長い滝から落ちる水の音は寺院をつむ山の中で静かに聞こえてくるのでしようか。子供の頃ミンミンとセミが鳴いていた。私の中では静かな畳の上に自分がいたように記憶されています。静かな中にも音を感じさせる一枚です。

飯田 収「花」(10)

花を描くのはとても難しい。なぜなら花は美しすぎるから、という理由で私はなるべく花を描かないよつにしております。飯田先生の花は赤、黄、ピンク、白と色彩豊富、それが背景の青とマッチしている。そして画面下方を斜めに走る机の色面、美しい花をみごとに描ききっています。

須賀 功「内苑の睡蓮」(10)

モネの睡蓮を思わせる一枚です。しかもモネ以上に繊細に描かれています。山

と睡蓮の配置が絶妙で遠近感を感じさせます。主役は睡蓮ですが湖の緑など脇役が、これを引き立て見る人に安心感を与えています。

唐澤 信安「ときあれば 散るもめでたし桜花」(80)

唐澤先生は桜の絵をたびたび出品されています。桜と年輪についての話を懇親会でなされました。先生の桜への思いが伝わってくる作品です。日本人が大好きな桜。「ときあれば、散るもめでたし桜花」この歌と同じくこの絵は散る前に大きく手を広げ大地に根を張り人生を謳歌しているようです。

鈴木 博「サリー」(10)

気になる一枚です。こちらを見つめる女性。見られているのは見ている観客ではないか。女性は斜めに身体を傾け座っている。笑っているわけでも泣いているわけでもない。怒っているのか？ その

表情からは彼女の心は読み取ることができない。しかし、じつと我々は見られている。

柴崎 晃「待春(乗鞍高原)」(30)

この絵を背景に描かれた動機やその場所について語られる柴崎先生は、とてもうれしそうでした。「性格もどこかこの山に通じるようです。手前に雪の白、後方に山の白を配置するという大胆な構図それでいて遠近感が出せる。よく考えられた白の使い方だと思いましたが。

青山 六弥「世親菩薩立像」(20)

先生は、この作品について、別稿の美術随想のなかで「ほぼ三月、精魂を込めて書き上げたので、愛おしく思われる。問題は、この作品を鑑賞される方々の目にどう映るかです」と書かれています。

先生はこの像に深い感銘をもたれ、その歴史まで調べられたそうです。絵は背景

に個性がでると聞いたことがあります。深い洞察力が感じられます。

赤松 和彦「関谷学校・椿谷」(20)

関谷学校について調べますと、「1670(寛文10)年、備前藩主の池田光政が庶民教育を目的に開いた学校。敷地内にある建造物のほとんどが国の重要文化財です。中国の孔子林の美を採ってここに植えられたといわれているカイノキは、晩秋のころ格別の色合いで紅葉する。また11月にはライトアップが行われ、昼間とは違った美しさが味わえる」とあります。

関谷学校は市民の憩い誇りの地なのでしょ。緑の濃淡によって遠近感がよく出ています。これに赤い積が色をそえています。歩いてみたい穏やかな日を感じさせてくれます。

飯田 文良「追羽根」(墨彩画) (100)

大きな一枚です。羽子板を持つ

少女はつれしそつな顔でもそこには真剣さが感じられます。羽がもうすぐ飛んでくるからでしょう。側でユウモラスな顔の犬が彼女を見守っています。少女の動きとじつと見守る犬の対照性の中にお正月の楽しいひと時が描かれています。

檀本 貴夫「養老溪谷(まぼろしの滝)」(20) まずマチエールのすじごさで圧倒される絵でした。しかしよく見るとその乱れ飛ぶような色彩の渦に驚かされません。黄緑赤その中を滝が走る。絵筆を取るものとしては一度は描いてみたいと思われる風景ですが、これを描くことは至難の業です。「まぼろしの滝」という題も絵に花を添えています。檀本先生は懇親会には出られませんが、「ご夫婦で会場に来られ、会員同士わきわきあいあいとお話されていました。」

金古 進「赤城山」(25)  
大きな空を背景に赤城山がどっしりと

腰をおろしている。そこに手前から続く道のどかな田園風景が広がっています。この道はきつとあの山につづいているのだろう。「季節もよし、さあ歩こうとするか」と思わせる一枚です。

川堀 耕平「カラコルムの少年」(10)  
この作品は地下の階段の正面、少し薄暗いところがありました。そのためかよけい生きているようで人目を引きました。カラコルムに行かれたいきさつなどお聞きしたい作品でした。

木内 徴子「あじさい」(10)  
「ゴキヤン」はとても頭がいい。色彩の帯で絵をつくってしまつ。この絵では主役であるアジサイは前方に小さく咲いている。この不思議な絵はなんだろう。観客の視線は最初にはあじさいにむかない中間、遠景を見て、そして初めて近くのあじさいに気づくのだ。

考ええられた色彩の配置、マイルドな

暖かさを感じる一枚である。

木村 典子「鳥と花」(20)  
かわいらしい花と鳥の登場です。絵の中で幸せそつに遊ぶ鳥や花、緑は安心感を与えます。その中にピンクの花、女性らしい愛情あふれる一枚でした。

楠 登「星空と鏡」(25)  
楠先生はマチエスの再来かと思われる一枚です。椅子に座る女性はペランダにいるのでしょうか。星空は右横に描かれています。星を見つめる女性の側に花が、色彩と線の美しさに心を配られた作者の姿が目に見えるようつです。

酒井 敏夫「八海山の谷にて」(30) × 50 cm (八海山は新潟県南魚沼市にある信仰の山、越後三山の表口にあたる主峰の一つで、標高1778メートル。越後三山只見国立公園地区に指定されている。

その谷をこのよつに白と黒で描かれている。雪に覆われた山や野、そこに川が流れている。八海山に対する信仰心が感じられるよつです。

佐久間正人「大日如来」(50)

大日如来の意味はヴィルシヤナ「光り輝き、遍く照らす」の意味、摩訶毘盧遮那(まかびるしやな)如来、遍照尊、遍照如来ともいいます。大日如来には「金剛界大日如来」と「胎蔵界大日如来」とがあり、「金剛頂経」から出た金剛界大日如来は、胸前で左手の人さし指を立て拳を作り、その人さし指を右手の拳で包み込む智拳印を結んでいる。金剛のよつに堅い密教の智慧を表す。「大日経」から出た胎蔵界大日如来は腹の前で左手を下に右手を上組む定印。森羅万象すべて大日如来が胎蔵することを表す。

いずれも、髻を結び頭上に宝冠を被り、瓔珞(ようろう)、「腕釧(わんせん)」、臂釧(ひせん)等の装身具で飾り、条帛を

着け、結跏趺坐する。坐像で彫る。

先生の如来は金剛界大日如来、やさしいお顔で人々を守っています。

櫻井 實「晩夏」(10)

やさしい光の中でこの大木はのびのびと枝を伸ばしています。黄色い葉っぱをつけた枝は秋を予感させるものなのでしょつか。あわい色調が画面の統一を図っています。仙台の夏はすこしやすいと感じさせます。表紙になった「老寿」は先生ご自身が美術随想に述べられております。

櫻井 寛子「酸芙蓉」(8)

背景の色彩の調子がとても素敵です。酔芙蓉を見事に描き、それをつつむ淡い紫、赤い印が不思議なことに画面を一層引き立てる役目をしています。これも才能の一つでしょつか。

白幡 裕子「はひ」(6)

ばらは自由に生きているよつです。大胆に描かれていますがよく見るとばらの表情が詳細に見事に表わされています。ピンク、白、黄、ブルーの色彩の中、ばらはつれしつに踊っているよつに見えます。

白幡 雄一「裸婦座像」(50)

人物描写の的確さに目を見張ります。椅子の背と女性の手を置いた座布団が画面を引き締めています。私が一番關心のある部分は主体と背景の関係を色彩を主に用いられていることです。右腕と背景の関係は特にすばらしいと思いました。

白矢 勝一「パリ Old Days」(30)

懇親会で目述べさせていただきましたが、私は佐伯祐三の大ファン。油絵の道具を持って厳寒のパリで絵を描きました。3時間描いていると歩けなくなります。しかしこれは至福の時間でとても楽しいものです。ゴッホ、ゴーギャン、フォー

ブから離れられず、なかなか自分の絵が描けません。

白矢けんじ「祇園白川舞妓さんが通る」(40) 舞妓さんが歩いていきます。屋根の上に子猫が覗いています。なぜ私の弟はこの絵を描いたのでしょうか。療養中の弟の心の中に一度ゆっくり入ってみたいものです。

鈴木 啓之「原始縄文・袴」(30) 迫力のある絵が3枚地下に飾られています。縄文時代を含めて地球は長い歴史を続け、土器は地球から離れて宇宙の中の記憶として残されている。地球と土器の対比これを取り巻く背景のマチナール。神秘的な一枚。

隅坂 修身「イスタンブールで出会った男」(6) まずタイトルがすてきです。そして絵の下にある文字。これらが絵のすばらしさを一層引き立てているよ

うに思います。線を主体として絵をつくるのはデッサン力を必要とします。デッサンのすばらしさにまいました。

新本 稔「瀬戸は白くれて」(15) こういう絵の描き方もあるのだなあと感心させられました。絵画は具象と抽象の間にすばらしいものがあると私なりに思っています。画面のどの色彩もこの絵を成立させ、一見乱暴に描かれたように見えるピンクの線はしっかりと絵を支えています。

村山 正則「兄弟(素描)」(8) 世の中が変わったせいでしょうか。こついつ風景は見かけられなくなっています。私は3人兄弟の長男。子供の頃弟をおんぶしていた昔の写真が残っており、この絵を見てなつかしく思いました。子供の表情がよく伝わってきます。デッサンのすばらしさを認めさせる一枚です。

安田 和子「花(静物)」(15) よく考えられた構図です。花と花瓶が背景にぴったりあっています。花瓶の様はバックと同じブルー。ゴーギャンのすかし効果が生きている。花はその色彩を誇らしげに示し、顔を自由に動かしている。バックの構成はよく考えられたものと思われま

安田 修一「高原の風景」(25)

最初に観客の眼は画面全体を占める高原に向けられる。この高原には人が上つていないように見えるそして雄大な空。と手前に可愛い色とりどりの花が咲いている。グリーンとブルーが大きく画面を占める。そして脇役を務める花を静かに配置する。心が洗われる一枚でした。

山崎 嘉弘「姉弟」(20)

山崎先生は静物 A嬢など5点も出品された。どれも力作でしたが、あえてこのgood

ものを取り上げさせていただきました。  
この作品も色彩の美しさが前面に出ている。  
果物や枝、葉っぱのおもしろさは言わずまでも  
ないがブラックの線、面を大胆に使い画面を  
引き締めているのに驚かされる。佐伯祐二は  
黒い線を日本式に勢いで描いています。こ  
の作品では違った趣の魅力となっています。

横倉 弘吉「椿」(8)

椿の花が静かにさいています。この奥  
ゆかしい感じは背景の統一された色彩に  
あるのでしょうか。

手前の花、葉と後の花、葉の遠近が色  
の彩度であらわされている。花瓶は途中  
までしか描かれていないが画面の外まで  
感じさせる力を持っている。力作です。

渡辺 晋「追想の在る舞台」(10)  
先生は文学の世界でも有名な方です。梶  
山季之の文学空間、ソウル、広島、ハワ  
イ、そして人びと『を大瀬裕康という  
ペンネームで出版されています。この本

の中でも原爆について書かれています。  
最初この作品の意味がよくわかりません  
でした。同じ広島から来られた江川先生  
の解説で、「ああ、なるほど」と感しまし  
た。

芝居の途中に原爆が落とされたこのこ  
と、手前はその後の原爆ドーム、後ろに  
あるのは被爆前のドーム。ドームの後ろ  
に原爆が、この恋人を今から襲つのでし  
ょうか。つつましく愛情を育んできた  
人々を戦争は一瞬の内に消滅させてしま  
います。この絵は先生の平和への願いが  
こめられているのでしょう。

野田 貞子「15世紀の天使達」(ステ  
ンドグラス)「120×60 cm

15世紀の天使達というタイトルで大  
きなステンドグラスが地下で展示されて  
いました。ステンドグラスはヨーロッパ  
の教会でよく見かけます。本来なら教会  
の窓に置かれ日光を受けるとその色彩の  
美しさがより以上に引き立つのでしょう。

この天使たちは後から光が当てられるこ  
とが考えられて作られて、赤や青が黄色  
が置かれています。この天使たちは何を  
するのだろうか。

天使といつと私は「幸福の王子」を思  
い浮かべます。優しい心をもった王子の  
像とツバメを神は天使に命じて天国に連  
れて行ってあげるのです。やさしい天使  
は二つの魂をそつとやさしくつつむので  
す。

来年度の開催は

10月下旬の予定

ギャラリー「悠玄」